戒環『楞厳経要解』の釈経特色について
――長水子璿『首楞厳義疏注経』との比較を中心として――

大澤邦由

一　はじめに

温陵戒環（?―一一八二あるいは一一八三）『楞厳経要解』（以下『要解』）は禅系として宋代以降広く受容された注釈書の一つである。戒環『要解』についての先行研究としては、大松博典「『楞厳経要解』について」[1]や、崔昌植「戒環の楞厳経教判について」[2]があり、戒環については水野弘元「戒環の法華経要解の研究」[3]や黄国清「宋代戒環的法華思想」[4]があり、また、拙稿「温陵戒環禅師『楞厳経要解』初探――特に泉州開元寺に着目して――」[5]があるが、全般的に言って『要解』の内容的な検討はほとんどなされていない。

戒環が『要解』を撰述するにあたって参照した『楞厳経』注釈書は『要解』巻一「開釈科・通敘科判」に拠れば（一）長水子璿（九六五―一〇三八）『首楞厳義疏注経』十巻（以下『義疏注経』と略称）、（二）孤山智円（九七六―一〇二二）『経疏』（散逸）或いは『谷響鈔』（散逸）、（三）閩中可度『楞厳経箋』十巻、（四）長慶道巘『楞厳説文』（散逸）、（五）泐潭曉月『標指要義』（散逸）、（六）王安石（一〇二一―一〇八六）『楞厳経解』（散逸）、（七）張商英（一〇四三―一一二二）『補註』（散逸）であると思われ[6]、これ以外にも参照したという。戒環はこれらの注釈、特にその科判に不満を持ち、独自の科判を作って注釈を行ったことを同書において述べている。しかし実際には、その科判は子璿『義疏注経』の影響を大きく受けていることは先述の拙論に記した。それだけでなく戒環の注釈自体も子璿の影響を受けた事は明末清初の銭謙益（一五八二―一六六四）が指摘するところであり、『楞厳経疏解蒙鈔』巻首之一「古今疏解品目」において次のように述べる。

> 蒙竊謂、温陵之解、以長水為椎輪、闇用其義門、而巧遮其面目、初非能絶出於長水也。長水由禅綜教、能用文字解脱、故其宗趣深。温陵用禅判教、主於解脱文字、故其宗趣捷。在華厳宗中、長水遠紹清

涼、温陵別承棗栢、斯其所以別与。[7]

ここで銭謙益は『要解』の注釈の内容は子璿を承けつつ、その思想は李通玄を承けたと指摘する。銭謙益のこのような指摘は『要解』と『義疏注経』の比較等を通して主張されたものと見られる。実際に両書を比較すれば、戒環の注釈は多くの箇所において子璿の『義疏注経』の内容をもとに書き改めているに過ぎないことがわかる。しかも問題は注釈文中に子璿の名を一切出さない点にある。銭謙益が「闇用其義門、而巧遮其面目」と批判するのはこの事に由るのであろう。

戒環が子璿の注釈を基礎としているならば、両者間の差異こそが、戒環の主張であり、注釈の思想的特徴であると推測することが可能となる。ここで差異と述べるのは、両者の主張が異なる箇所のみならず、戒環が子璿の注釈からあえて継承しなかったものも含まれる。これを論証するためには、本来的には全文にわたる両者の比較検討が必要となるが、本論では特に『要解』の他文献への言及・引用に限り、それを子璿などと比較することを通じて、戒環『要解』の注釈の特徴を探り、銭謙益の上述の論の検証を行う。

二　引用・言及箇所の検討

『要解』において、他の経典や文献が明確に引用或いは言及される箇所は、子璿『義疏注経』に比すれば頗る少ない。筆者の調査に拠れば、「開釈科」を除く『楞厳経』本文への注釈文において他文献を引用及び言及する箇所は延べ五五箇所ある。『要解』の表記通りにその内訳を記せば次の通りとなる。

華厳　一二、倶舎　五、円覚　四、楞伽経・楞伽　三、涅槃・涅槃経　三、法華　二、維摩経・浄名　二、観経　二、大論・智論　二、列子　一、法界頌　一、起信　一、漢書　一、大集経　一、荘子　一、宝積経　一、深密経　一、梵網　一、僧祇律　一、肇法師　一、阿含　一、薩婆多論　一、左伝　一、孤山頌大経四依　一、瓔珞経　一、灌頂経　一、金剛　一、成論　一、陀羅尼経　一、婆沙論　一。

『要解』の引用・言及文献のうち、『義疏注経』との一致性の高いものは一四箇所あり、引用文献名としては『列子』『起信論』『大集経』『荘子』『解深密経』『左伝』『瓔珞経』『倶舎論』『大智度論』『婆沙論』がある。例えば、戒環は「『列子』云、其寤也形開、其寐也形交。」（巻五、新纂続蔵一一、八〇〇上）と『列子』を引用するが、同一の文章が『義疏注経』巻三（大正三九、八六二中）にある一方、『列子』には注として「『荘子』曰、其寐也神交、其覚也形開」[8]があるのみである。この三者を比較すれば戒環は『義疏注経』のみを参照して記していることが推測できる。『荘子』と『瓔珞経』を除く上

記文献も同様である。『要解』巻九で『解深密経』を引く例のように『義疏注経』の引用文を、経名を含めて正確に引用する例もあるが、多くの引用では簡略化や改変が見られる。例えば、『要解』巻七の『起信論』の引用（新纂続蔵一一、八一一上）においては、『起信論』及び『義疏注経』の「起」を「動」に変えており、(9)『要解』巻一八の『涅槃経』の引用（新纂続蔵一一、八七六中）では、子璿が『涅槃経』巻七の所説をまとめたものを戒環は更に簡略化している。『要解』巻一六の『倶舎』の引用（新纂続蔵一一、八六〇上）に至っては、『義疏注経』自体の注釈文を誤って『倶舎』と述べるものもあり不適切である。

『要解』と『義疏注経』の比較を通じて、思想的に有意と思われる差異は『大智度論』の引用箇所に見られる。両者は『楞厳経』巻九「又復於中得少為足、如第四禅無聞比丘、妄言証聖、天報已畢、衰相現前、謗阿羅漢、身遭後有、墮阿鼻獄」という句を注釈するにあたって『大智度論』巻一七の所説をもとに解説を施している。以下にこの三者を比較してみたい。

『大智度論』巻一七：一比丘得四禅、生増上慢謂得四道。得初禅時、謂是須陀洹、第二禅時、謂是斯陀含、第三禅時、謂是阿那含、第四禅時、謂得阿羅漢。恃是而止、不復求進。命欲尽時、見有四禅中陰相来、便生邪見、謂「無涅槃、仏為欺我。」悪邪生故、失四禅中陰、便見阿鼻泥犂中陰相、命終即生阿鼻地獄。（中略）諸比丘皆大驚怪、「此人坐禅持戒、所由爾耶。」仏言「此人増上慢、得四禅時、謂得四道故。（中略）仏説偈言「多聞持戒禅、未得無漏法。（後略）」（大正二五、一八九上）

『義疏注経』巻九：『智論』所説、此比丘者、不広尋経論、師心修行、無広聞慧。不識諸禅三界地位、但精勤不息、証得初禅謂是初果、乃至四禅、離八災患、便謂已証阿羅漢果。（大正三九、九四七中）

『要解』巻一七：『智論』説、「比丘無多聞慧、但勤小行、得生四禅、便謂已証阿羅漢。」（新纂続蔵一一、八六九上）

ここでは、戒環だけでなく子璿もまた引用箇所を改変している。『義疏注経』の「不広尋経論、師心修行、無広聞慧」（A）と「離八災患」（B）との二句は原文になく、子璿が増補した文章であり引用の域を超える。もともと『大智度論』では、比丘が多聞で坐禅や持戒をしていたにも関わらず、増上慢であったがために阿鼻地獄に転生したとの話であった。しかし、子璿は（A）の語句を挿入することによって、この文章を増上慢への批判から、経論を学習して聞慧を増長することなく専ら自心を尊んで修行することへの批判に改変している。これは禅宗に対する批判と見ることができる。

一方、『要解』は全体的には『義疏注経』に近く、『大智度論』を直接参照した可能性は低いと思われる。『義疏注経』において追加された（A）と（B）のうち、「無広聞慧」を

除く箇所を削除し、「無広聞慧」を「無多聞慧」と変えている。（A）の前二句の削除は重要であるが、ともに重要なのは「広」から「多」への改変である。それは、戒環の説く「聞慧」が通常のその意味とは異なり、観音耳根円通の実践において聞塵を対象として耳根から三摩地に次第に入ることを意味するからである。[10]『義疏注経』「無広聞慧」の場合、具体的には経論を広く参究することがないとの意味となる。一方、『要解』「無多聞慧」の場合、多く聞慧の修行を実践していないとの意味となる。つまり、（A）の二句の削除部分も合わせて考えれば、戒環は批判の対象を、広く経論を研究せず心を師とする者から、正しく耳根円通を修せずして阿羅漢を証したと主張する者に変じており、禅宗を批判の対象から除外している。

この他に直接原典を見て引用・言及を施したと思われるものに、『華厳経』『円覚経』『法華経』『楞伽経』『観無量寿経』『梵網経』『涅槃経』『陀羅尼集経』がある。この中で、引用・言及数が突出しているのは『華厳経』であり、そのほぼすべては『義疏注経』に拠らない戒環独自のものである。ここで指摘すべきは、「華厳」としつつも、実際には李通玄『華厳経合論』に拠っていたと推測されることで、これは「『華厳』謂、初地菩薩多作閻浮提王」（巻一七、新纂続蔵一一、八六八上）とする箇所が実際は『華厳経合論』の注釈文であることや、「『華厳』「百二十大数」初云、一百洛叉為一倶胝」（巻二一、新纂続蔵一一、八〇〇上）とする箇所の「百二十大数」は『華厳経合論』巻七三に出で、「初め」とは当書における位置関係を示すものであることから知られる。戒環が李通玄の影響を受けたことは、『華厳経要解』の自序に「以方山為正、清涼為助」（新纂続蔵八、四五一上）等とあることや、銭謙益の前述の指摘、及び先学の指摘[11]によりすでに明かされているが、引用文からもこの事が証明される。なお、『華厳経』について、戒環は『楞厳経』巻七の道場建立の儀軌についての注釈文中において、「曰愚所宗者、『華厳』『大論』。若熟覧彼、知此非臆矣」（『要解』巻一三、新纂続蔵一一、八四三上）と述べ、戒環自身が『華厳経』と『大論』（『大智度論』か）を宗とすると表明していることは注目に値する。しかしこれが、巻七についてのみ述べたものか、基本的立場の表明であるかは検討しなければならない。

他に、直接的には道誠『釈氏要覧』からの引用と見られるものに、『楞厳経』巻六の乞食についての「僧祇律」「肇法師」、及び蓄財に関する『阿含』、『薩婆多論』の各引用がある。

また、智円の『谷響鈔』の影響が認められるものもある。『要解』巻一六の『成論』の引用は同様の引用文が呉興仁岳『楞厳経熏聞記』巻五に「孤山引」として、思坦『集註』巻

二に「『谷響』云」として引用されている。『観経』や『漢書』、『灌頂経』を引く例も同様であり、智円からの引用の可能性が高い。また、『要解』巻一三には智円の偈と思われる「孤山頌大経四依」も引用される。

筆者は、『要解』に覚範慧洪（一〇七一―一一二八）『尊頂法論』の影響があったと考える。『要解』巻八の真如の異称に関する『楞伽経』と『宝積経』の引用はほぼ同様の内容が慧洪造論、雷庵正受編『楞厳経合論』（嘉泰三年〔一二〇三〕正受序）の同経文の注釈箇所に見られる。ここで問題となるのは戒環が慧洪の論を参照しえたかである。陳得力『釈恵洪研究』に拠れば、慧洪『尊頂法論』は彼が政和元年（一一一一）に海南に貶遷された翌年より撰述され、政和六年（一一一六）に筠州（江西省）にて完成した。[12] 一方、泉州開元寺の戒環『要解』は建炎元年（一一二七）八月一五日以前[13]の成立である。両書の時間的前後関係としては『要解』が遅い。また、引用文の比較からもただ、その場合、戒環が何故慧洪の名を前述の参考諸師に挙げなかったかは疑問が残る。

就中、『宝積経』の引用（新纂続蔵一一、八二二上）については大きな問題を含む。戒環は『尊頂法論』から引いたと見られる引用文に「空」の一字を挿入して、『宝積経』に述べられ、元々『勝鬘経』に出る「空如来蔵」「不空如来蔵」という概念の上に、更に「空不空如来蔵」を創出し、二種の如来蔵を三種に改変し、その結果として、明末の如来蔵論に大きな影響を与えた。戒環に対し銭謙益は「誤引」として厳しく批判する。[14] しかし、戒環が「空不空如来蔵」をあえて追記した理由が不明であり、明末の如来蔵論の展開についても考察が必要であるため、これに関しては別稿に譲りたい。

戒環が『義疏注経』など他の『楞厳経』注釈書を明示的に引用しないことは一つの特徴であるが、同時にそれらへの批判もほとんど行っていない。子璿に向けたであろう批判的箇所はわずかに『要解』巻一「或局『維摩経』謂非如来呵責、安知如来不呵独浄名哉」（新纂続蔵一一、七七九上）という箇所に見られるのみである。但し、「今人」などに向けた同時代的批判は数箇所に確認できる。

三　まとめ

以上、戒環『要解』の注釈の特徴について探るため、特にその引用箇所について、『義疏注経』等との比較を中心として検討した。本論の考察からは冒頭に引用した銭謙益の戒環評は現時点においては妥当だと考えられる。つまり、『要解』の注釈の内容としては『義疏注経』の影響を承けてはいるものの、多量の経典研究を要せず文字からの解脱を目指すという姿勢において子璿とは一線を画す。それは注釈内容の他、他文献への言及数の少なさ、及び引用文の性質といった特色

からも窺うことができる。これが果たして李通玄の影響であるかは後考に俟ちたい。多聞への批判は、本論で論じなかった注釈文にも見られるが、一体、それは『楞厳経』自体に繰り返し強調されるものであり、明末の殷邁（一五一二―八一）による「不若只以『楞厳』釈『楞厳』也。（中略）以経解経、無出温陵之右者」（新纂続蔵一三、五〇五下）という戒環への評価も適切と考える。

戒環の注釈に直接的影響を与えた文献としては銭謙益の指摘するように『義疏注経』や李通玄『華厳経合論』があるが、他に天台系の智円『谷響鈔』や道誠『釈氏要覧』の影響が確認でき、及び『円覚経』『法華経』『楞伽経』『観無量寿経』『梵網経』『涅槃経』『陀羅尼集経』を参照したものと考えられ、慧洪『尊頂法論』を参照した可能性も高い。

1　『宗学研究』第三一号、曹洞宗宗学研究所、一九八九。
2　大久保良順先生記念論文集刊行会編『大久保良順先生傘寿記念論文集――仏教文化の展開――』山喜房仏書林、一九九四。
3　坂本幸男編『法華経の中国的展開』法華研究　四、平楽寺書店、一九七二。
4　『揭諦』第二〇期、（台湾）南華大学哲学与生命教育学系、二〇一一。
5　『駒澤大学仏教学部研究紀要』第七六号、駒澤大学、二〇一八。
6　佚書の書名については銭謙益『楞厳経疏解蒙鈔』巻首之一「古今疏解品目」（新纂続蔵一三、五〇三―五〇四）を参照。
7　銭謙益『楞厳経疏解蒙鈔』巻首之一「古今疏解品目」、新纂続蔵一三、五〇四下。
8　楊伯峻撰『列子集釈』巻三、中華書局、一九七九、一〇三頁。
9　なお、『起信論』では「謂不如実知真如法一、故不覚心起而有其念」（大正三二、五七七上）とする。
10　『要解』巻一一（新纂続蔵一一、八三一上）を参照。戒環らの聞慧理解については拙論「『楞厳経』の聞思修について」（『駒澤大学仏教学部論集』第四九号、二〇一八）に執筆予定。
11　例えば高峰了洲『華厳と禅との通路』（南都仏教研究会、一九五六、一四〇頁）。
12　陳自力『釋恵洪研究』、中華書局、二〇〇五、一二三頁。
13　及南「首楞厳経要解序」の撰述年月日による（新纂続蔵一二、七七六中）。
14　『楞厳経疏解蒙鈔』巻首之二「諮決疑義十科」の「第九古今得失者」（新纂続蔵一三、五一四中）や巻四之一（同六三二下）、巻四之二（同六五一上）を参照。

〈キーワード〉　温陵戒環、長水子璿、『楞厳経要解』、『首楞厳義疏注経』、覚範慧洪、李通玄

（駒澤大学・博士（哲学））

新刊紹介

北川前肇先生　古稀記念論文集刊行会　編

日蓮教学をめぐる諸問題
立正大学北川前肇先生古稀記念論文集

A五版・九八四頁・本体価格三〇、〇〇〇円

山喜房佛書林・二〇一八年三月